

音楽を通してみる ブルターニュの文化と その20世紀における変遷

2007年10月29日 和光大学H棟301教室

イヴ・ドゥフランクス氏による講演会

(Yves Defrance : レンヌ第二大学教授、フランス民族音楽学会会長)

「音楽を通してみるブルターニュの文化とその20世紀における変遷」

(Evolution de la culture bretonne au XXe siècle: l'exemple de la musique)

が、和光大学総合文化研究所の主催で開催された。

講演では、ブルターニュの伝統的な音楽の特徴と、それが近年、社会の近代化と連動してどのような変化をとげてきたのかについて、貴重な映像資料や音声資料も交えながら、興味深い話が繰り広げられた。伝統的な社会における音楽の役割や、音楽と言語との深いつながり、そして近年のブルターニュの人々にとっての音楽の位置づけや地域の活性化のために果たしている役割についても言及がされた。

講演会コーディネーター：中力えり(所員／現代人間学部講師)



ブルターニュ独自の古い楽器、ボンバルド（オーボエの一種）とビニウ（バグパイプの一種）の共演風景。2006年、カンペール（仏・フィニステール県）にて。photo: Padrig SICARD

ブルターニュの近代化と音楽

イヴ・ドゥフランス氏講演報告

中力えり 所員／現代人間学部講師

——音楽を通した地域の再生

ブルターニュは、地図で確認できる通り、フランス、そしてヨーロッパ大陸の西端に位置している地方である。

講演ではまず、ブルターニュが第二次世界大戦後、非常に貧しい地域として知られていたことが紹介された。ブルターニュは戦後、フランスの諸地域のなかで、経済的にみて下から2番目に位置していたという。しかし、今日では、フランス本土にある22の地域圏のうち、上から7番目に位置するまでになっており、そうしたためざましい経済発展を遂げた地域として、また、学力や研究の水準も高い地域として知られるようになってきていることが示された。

では、その秘訣は何であったのか。氏によれば、それは奇跡などではなく、1950年から行われてきた地道な努力の結果、ブルターニュの人々がアイデンティ

ティの持つ力を自覚し、自信を持つようになったことと大きく関係しているという。

そして、ブルターニュのアイデンティティを再構築し、地域を再生へと導くのに大きな役割を担ったものとして、音楽があげられた。ブルターニュの音楽は、文化的な力であり、経済的な力にもなっているという。ブルターニュでは、とても古い、ヨーロッパではほとんど聴かれなくなっている音楽が今日も保たれていること、そして近年それが大きな支持



を得るようになっていたことが紹介された。ブルターニュの音楽を演奏する人は今日では何千人とおり、プロの演奏家も何百人にものぼるといふ。ブルターニュの音楽は、ブルターニュだけでなく、遠く離れた地でも演奏されるようになっており、それにより、ブルターニュとその文化、そしてアイデンティティは世界に広く紹介されるようになっていたという。今日、音楽がブルターニュにとって一大産業となっている



イヴ・ドゥフランス氏

こと（例えば新作CDが、歌、器楽、ダンス音楽など、さまざまなジャンルで毎年それぞれ約100タイトルずつ出されるまでになっていること、夏に音楽フェスティバルが各地で開かれ大変な賑いをみせていること、音楽人口が増え、それに伴って楽器を作る職人なども増えたことなど）、そしてブルターニュのイメージアップに大きく貢献していることも併せて紹介された。

——伝統的な社会の衰退と音楽

では、ブルターニュの音楽はなぜ支持されているのか。それは、生活や感情の面で、普遍的な現実在即している音楽だからではないかとの見解が示された。しかし、それだけではなく、ブルターニュの音楽が支持される背景には、伝統的な社会⁽¹⁾へのノスタルジーも関係しているという。

今日では、都市に暮らす人口の方が多くなっているが、かつては農村で暮らす人々の方が多かった。ヨーロッパでは、伝統的な農村社会は10世紀にあらわれ、20世紀まで続いたが、その1000年の間は、社会にあまり大きな変化がみられず、同じような社会が再生産され続けていたという。しかし2世紀前頃から、農村から人が大量に流出するようになり、社会の工業化、近代化が進行した。それに対し、我々は皆、父母や祖父母など、家族のなかで伝統的な社会を経験している人

(1) 伝統的な社会とは、ひとつの村単位あるいは2～3の村単位など、人々が小さなグループで暮らしており、全員が顔見知りで、お互いの名前を知っているような社会を指している。それは、相互に面識があり、お互いを監視し、生活の時間を共有しているような社会であり、小さな共同体内で一緒に働き、生産したものを共に消費し、年中行事も一緒に祝うような、全員が同じ方言を話し、同じような服を着て、考え方も同じであるような社会、結婚する時にも、同じ村の出身者同士、あるいは近隣の村の人と結婚するような社会である。お金はないが物々交換や労力の交換がみられるような社会でもあり、何か困ったことがあったときには非常に利点のある社会といえる。しかし、新しいこと、近代的なこと、よそ者に対しては臆病な社会でもある。伝統的な社会の難点は、従って、何か変化を求めた時といえる。文化的なモデルを示すお年寄りは、知恵をもたらすが、自分達の考え方を押し付けもする。そのため、新しいこと、異なったことを提案したい者は、社会から排除されることになる。こうした特徴は、ブルターニュに限らず、日本も含めた伝統的な社会に共通してみられたことである。

の記憶があるため、伝統的な社会に対して、ある種のノスタルジーを覚えるというのである。伝統的な社会は、理想的な社会ということではないが、大きなヒエラルキーがなく、ある種の文化的な快適さがある、ストレスがあまりみられないような、いい面、悪い面をお互いが共有する社会として了解されている。しかしこのような伝統的な社会は、もはや存在しない。そうした社会は、博物館などに残っているさまざまな物、古い家や家具、衣装などを通してしか知ることができないような、かなり遠い存在となっている。

しかし音楽は、数秒のうちに記憶を呼び覚ます力をもっているという。何かを連想させる音楽の力というのはとても強く、その例として、クラシック音楽でバッハの音楽を聴くと瞬く間に18世紀を思い起こし、カントリー・ミュージックを聴いたときには、牧場にいるような感覚、あるいはロデオをしているような感覚になることが挙げられた。フランスでは、例えばテレビのコマーシャルで日本のことを連想させようとする場合には、お琴の音色を流すことが多いというのだが、それは、ヨーロッパの人が、その音色を聞いた時にすぐに極東にいる感覚になるからであるという。

このように、ブルターニュの音楽が支持されるようになったのは、それが、伝統的な社会が失われるなかで、かつての記憶を呼び覚ます力を持っているからだとの考えが示された。そして、今日のブルターニュ音楽の隆盛は、1950年代から、有志が歌や楽曲を集め、また実際に演奏するという地道な努力を行った結果、可能になったとの見解も示された。即ち、農業が機械化され、工業化がすすみ、農村からパリなどへ人口が流出するなど、社会の変化に直面した際、ブルターニュの人々は、近代化を受け入れるのと同時に、何か大切なものを失っているのではないかということに気がついたのだという。そこで、歌や楽曲が収集されるようになり、それらが視聴覚ライブラリーに保存されるのと同時に、実際に演奏されるようにもなったことが、今日のブームにつながったのだという。ドゥフランス氏自身、これまでに10万曲を収集したという。

——音楽と言語

伝統的な社会では、音楽は日常生活の一部を成していた。音楽は文化の一部であり、そのコンテクストから切り離してみることはできないことも強調された。そうした文脈のなかには、言語状況も含まれる。

ブルターニュでは今日、三つの言語が話されている。一つはフランス語であり、これは、現在では全員が話すことができる言語になっている。しかし、フランス革命当時は、その数字は10%程度でしかなかった。

二つ目はブルトン語である。これは、ブルターニュの西部で話されている言語であるが、フランス語よりもずっと古くから用いられている言語で、アイルラン

ド語、スコットランド・ゲール語、ウェールズ語と同じケルト系の言語である。

三つ目はガロ語である。この言語はあまり知られておらず、話者数も少ない。ガロ語は、スペイン語やイタリア語、フランス語と同じくラテン系の言語である。しかし、ケルト語の語彙が多く取り入れられているという特徴をもっている。

音楽にとって言語が重要な意味を持つということは、クラシック音楽がイタリア語をベースとしてつくられたことや、今日のバラエティ音楽にとって英語が重要な役割を果たしていること、あるいはジャズが英語とアフリカの諸言語が出会うことによって生まれたことから類推できるだろう。ブルターニュの場合、伝統的なメロディーに大きな影響を与えたのは、特にブルターニュの西部で話されているブルトン語であることが紹介された。

——ブルターニュの音楽の変遷

実際のブルターニュの音楽の特徴については、音声資料や映像資料をもとに説明があった。かつての伝統的な社会に近いかたちで、ある村の住民が週末の夕べに、カフェに集まって歌う場面の映像がまず紹介された。こうして村人がつどって歌うことはフランスでは珍しいことになっているが、ブルターニュではまだみられる光景であるという。歌の歌詞は、フランス語、ブルトン語、ガロ語と、その地域によって異なり、また口頭伝承されているものであるという。

次に紹介されたのは、フェスト・ノーズ (Fest Noz) という、輪舞を楽しむためのダンス・パーティーの様子である。ブルターニュでは、歌だけでなく踊りも盛んであり、かつては各村々で20人ぐらいの人が集まり、輪舞を楽しんでいたという。今日では様変わりし、各地から集まった200人ぐらいが、大きな会場で土曜日の夜に踊る様子が各地でみられるようになっているという。それがフェスト・ノーズと呼ばれる「夜のお祭り」である。かつてと異なるのは、伝統的な社会では、踊る時には声で伴奏することが多かったのに対し、今日では、ステージ上で音楽を演奏する人がいることである。

伝統的な社会では音楽は日常生活の一部を成していた訳であるが、今日、人々がブルターニュに伝わる歌を歌い、踊りを踊ることは、文化を継承するために行っている自発的な行為であることも説明された。

日曜日などに催される、歌いながら歩くハイキングもそうした選択の一環として位置付けられるとして、参加者が歩きながら伝統的な歌を歌



村人がカフェにつどって歌い、楽しむ様子を紹介



ボンバルドとビニウの吹き手
1905年、カルナック（仏・モルビアン県）Collection Yves Defrance

う様子が映像で紹介された。昔は交通手段が発達していなかったため、歩いて移動することが多かった訳だが、そうした際に、自分自身を励まし、また気を紛らわすために歌を歌う習慣があったという。今日では、その目的は、共にいることの楽しみ、歩くことの喜びを共有することになっているが、こうした試みも、文化の継承に貢献しているという。

歌や踊りだけでなく、ブルターニュには独自の古い楽器もあるということで、ビニウ（Biniou）というバグパイプの一種やボンバルド（Bombarde）というオーボエの一種も紹介された。ビニウは、高音が出る楽器のため、単独ではなく、ボンバルドと一緒に演奏されるのが慣わしであったという。これらの楽器は、バイオリンやクラリネット、アコーディオン

といった楽器の普及とともに演奏されなくなり、第二次世界大戦後は、ほとんど奏者がいなくなってしまったという。しかし、生活の一部としての音楽から、聞いて楽しむ音楽へという転換がみられるようになるなかで、伝統的な楽器はかつてとは違う場面で、再び演奏されるようになっているという。例えば、教会でのコンサートで、パイプオルガンと一緒にボンバルドが演奏されるというような光景がみられるようになっている。

伝統的な音楽を新たなかたちで継承していこうという試みは、バガッド（Bagad）と呼ばれる30人ぐらいからなる楽団でもみられるという。かつてはビニウとボンバルドは二人で演奏されるものであった。しかし今日では、ブルターニュの若い人々が、楽団で、大勢で演奏するようになっている。そうしたバガッドは、いまではブルターニュ内外で100以上みられるという。そこでは新しい楽器も取り入れられており、例えばスコットランドのパクパイプでブルターニュ風の演奏をするといった試みも行われている。最後に紹介されたバガッドの実際の演奏の映像からは、ブルターニュで、新しい感覚の音楽が着実に生み出されていることを実感することが出来た。

今回、音楽を通してブルターニュの社会、そして文化をみていくことにより、それがどのように変容してきたのかを大変よく理解することが出来た。さらには、ブルターニュが音楽により、どのように経済的、文化的な復興を遂げ、今後発展していこうとしているのかについても知ることが出来、大変興味深い講演となった。

[ちゅうりき えり]